

ひなぎくの森

第14
文 * sawori

「ようこそ、ひなぎく！ぼくの故郷、フランスへ！」
そうだ、私は来てしまったのだ。フランソワに押され、訳もわからないまま休みを申請しあっさりとして受理され、なんだか腑に落ちないまま、フランスに来てしまったのだ。そして今シャルル・ド・ゴール空港。
「ひなぎくの行きたいところ、一応事前に聞いてますから、今日はぼくがエスコートするので安心していてくださいね。」
「待って、今日はすぐにフランソワのお家に行って、ソフィアのお墓参りしない？お別れをちゃんと行って、観光はそれからでもいいから。」
それを聞いてフランソワのブルーの目は涙でいっぱいになった。「そうですよね、僕のお姉さんなんですから・・・ありがとう、ひなぎく。優しい人ですね。」
で、なぜかハグ。なぜかほっぺにキス。
「こらこら」引き剥がすひなぎく。「なんですか。フランスでは当たり前ですよ、郷に行つては剛に従え従えですよ。」覚えた日本語の使いどころ、うまさぎない？
ヴェルサイユへは、空港から電車を乗り継いで1時間半くらい。
降りるとそこは、ベルサイユのばらだった。
「なにこの街！！！！素敵すぎる！！！！ぜんぶ石畳！！街全体がフランス革命！！！」
「ぼくにとっては普通ですけど、そんなに喜んでもらえて嬉しいです。」
あれ？フランソワってこんなに背が高かった？
ヴェルサイユの石畳の街で、行き交うフランス人たちに混じったフランソワは日本で見る違和感が無い。ふわふわしたブロンドの髪と、青い瞳、整った顔立ち、センスの良い服と靴。
「フランソワって、フランスで見ると余計アンソニーに見えるね。」
「それ、褒めてます？あ、こっちのパリ通り側なんです。歴史的建物なので古いですけど、ひなぎくは結構好きだと思います。こっちです・・・」
そうやって私の手を取り反対側の通りへ移ろうとするフランソワの斜め後ろから見る姿になぜかわからないけど、懐かしい気持ちとドキドキを感じた。石畳を踏み駆け出すフランソワの白いジャックパーセル、なびくジョンストンズのグレーのマフラー。なぜか愛しく思えてくる。
あれ、なにになになになに？？？
「着きました、意外に駅から近いでしょう？両親と僕だけなので小さいアパートですけど。」
「わ！」着いた先はレ・ミゼラブルに出てくるんじゃないかと思うくらい歴史的で美しいアパートだった。
「ようこそ、我が家へ」「す、素敵すぎるよ～～～」

～つづく～

* ひなぎくの森のカルチャーその14

「フランス観光その1：ヴェルサイユ」



パリからRERでヴェルサイユに向かいます。



ヴェルサイユ・シャトー駅
全ての建造物が美しい。。



←ヴェルサイユの街並み

ヴェルサイユ

私が旅行したのはだいぶ前なので、記憶が曖昧なのですが、それでも電車からヴェルサイユ駅を降りた時の感動は忘れられません！街全体がお城なんじゃないかと思うくらい素敵でした。ぜんぶ石畳で本当に異世界でした。
フランソワのモデルにしている、フェニックスのトーマスは「ヴェルサイユは暇すぎて音楽をやるしかなかった」と言っているようで、フランソワも普通の街だと思っています。
次回はヴェルサイユ宮殿やルーブル美術館、パリ市内を擬似観光してみたいと思います！

(前回までのあらすじ)

フランソワの愛犬ソフィアが亡くなり、一時帰国するフランソワと一緒にフランスに行くことになったひなぎく。
「ひなぎくの森」のバックナンバーはホームページでご覧になれます→

* sawori *

